

私の散歩

加藤文子

今年最後の展覧会が終わり、盆栽も温室へ取り込んだ。空かちになった外の棚のよこれもタワシをかけてきれいにした。

ひと通り冬を迎える準備ができた。

年賀状のあて名書きをはじめするには少しはやいので、再来年のカレンダーの制作にとりかかる。

盆栽の仕事の少ない冬のあいだにできることで、楽しくて充実感のあることを考えていたら、カレンダーが浮かんできた。

そのカレンダーづくりも、今回で六度目を迎える。盆栽や庭の風景などを収めた日々の記録や、連載用に描いたイラストからイメージに合ったものを選んで十二月分構成する。

はじめは要領がわからずドタバタしてばかりいた。最初のカレンダーは、イラストと盆栽の画像がうまくコラージュできなくて、暦が読みづらくて実用性に欠ける、そんなご指摘も頂いた。



毎年改良を加えながら制作をつづけている。

画像を選ぶには苦手なコンピューターと対峙しなければならぬ。

年代順に分けたたくさんさんの画像を見ているうちに、肩がはって頭がポォツツとしてくる。我慢して続けようとする苦痛になる。我慢しているのも良くはない、さりとてやめる気もしない。

そんな時、夫の散歩を思い出す。

夫が散歩をするように、私もコンピューターと付き合ってみるのはどうだろう。

一枚一枚に写し出された折々の風景をながめてみようか。三十分、いえいえ二十分、もつと短くてもいい。

冬のあいだにやり終えることができなければ、再来年は休めばいい。そのくらいの気持ちでぞんでみよう。

カレンダーのために選ぶゾオという力みもなくして散歩の気分ですすんでみると、楽しくなった。目的の枠をゆるめて画像に目を通してみる。するといろいろなことが見えてくる。

デジカメで記録をはじめたのは、二〇〇九年のこと。カメラにふれたことになかった私は、ピントや光の調整をするのが精一杯。背景も繁雑で、構図まで気がまわらない。何を撮りたかったのか、今では皆目見当のつかないものもある。

木立を見上げて枝先の向こうの空を写したものと、とりとめがなさすぎる。でもあの時は何かに反応したのだろう、どこかに心動かされたのだろう。六年たったこのごろ、わずかながらましになったのか、きれいと思った瞬間のうっとり感がそのまま撮れているものもある。

そのひとコマから写した時の空気や自分自身までもが鮮明によみがえってくるから不思議だ。

夕方最後の光に写し出された温室のブロンズの情景、葉っぱや枝先の輝き、大好きなあこがれの世界だ。

それから、門扉から玄関に通じる野草の盆栽が載る鉄のスタンドのあたりは繰りかえし撮っている。

特に午後の光のペールに包まれて風に揺れる風知草やリンドウ、苔におおわれた中からゲンノシヨウコやユリが伸び出して共生する大きな野草の盆栽など、何度見ても飽きない。ついシャッターをきってしまう。

画像の物語は尽きない。すべての植物が変化しつづけているという証あかしも伝えてくれる。年を追うごとにしなやかさを増して、それぞれが少しずつやさしい家族のようになっていく。

記憶からこぼれ落ちた事象に呼び覚まされて、手が止まったり、思いが留まったり、行き着く所がわからなくなっている。